成蹊會誌
第一號

私の氣持

成蹊實務學校
同窓會委員長　大類袈裟吉

同窓生！　同じ學校の卒業生と面談すると、その人が初對面であつても親愛感を催し、何のわだかまりもなく話が出來る。そして總てに好意が持てる。まして其の人が同級生であつたり、在校中在學時期を同じくし顔見知りであつたりすると、特に其の感が深く其の人の社會的地位の如何を忘れて、お前、俺の間柄になつて話がはづむ。又同窓機關誌などに熟知の友の氏名が記載されてゐるのを見ると活字にひきつけられ、更に健在を知ると限りない喜びを感づる。同窓生には不思議な魅力がある。

母校！　自分達の教えて貰つた先生はゐなくとも、學校には面識の人は皆無になつても、校舍やその場所は變つてゐても、そして又疎遠勝ちで校内事情はわからなくとも、母校の名を聞いたり、母校の名を活字で見たりすると、自然に注意が引かれる。自分がかつて經驗した母校の特徴や癖が學校の何處かににじみでてゐると更になつかしさを增す。たとえそれが無關係の人には感心されぬことであつても母校の評判がよかつたり、母校が發展してゆく樣や在校生が何かの競技に他校を壓して優勝したりしたこと等を、傳承したり仄聞すると嬉しくなる。場合によつては、得意になり在りし日の自分の自慢話の一つも出したくなる。平素は忘れてゐても母校への執着心は何處かに生きてゐる。

希望！　未知未見の人とでも同窓生は成蹊の名の下に交りを厚くしてゆきたいと思うが、數多くの同窓生ではお互に交際に限度があろう。そこで卒業した學校を單位に、或ひは卒業期を基準に、其他種々な方法で一層深く卒業生間の交誼を結び、それからそれへと連絡をつけ全卒業生が渾然一體となつた成蹊會にしたい。そして成蹊會の爲し得る限度に於て、又他の迷惑とならぬ範圍内で母校の興隆に協力したいと思ふ。

成蹊會誌に寄せて

成蹊中學校
同窓會委員長　栗林一二

私は大正七年に中學第二回目の卒業生として母校を去りましたから今日では既に三十一年の昔となります。其後勤めの關係から海外にて暮らす方が長く昨年末十一年振りで歸國致しました。第一に同窓諸氏に御會ひし度く思つて居りました處に集りに御招きを受けましたので喜んで出席したのでありますが偶々前委員長伊藤友一兄が御轉任の爲め辭任を申出られた爲次に舊いといふ理由から私が後任を命ぜられる事になり甚々戸迷ひした次第であります。

唯中學同窓會については其の創立當時御手傳いした事があります。同級の中野謙君が大正十三年に英國から歸朝して同窓會を起さうと提議され創立會を丸の内生命保險協會で催しました。桃源會とは私が提案したのでありまして暫くは會誌『桃源』を發行するやら講演會遠足會等を催しました。中心となつて奔走されたのは前記の中野兄であり其の他御盡力下さつた委員の内記憶に殘るのは伊藤友一、早水守夫、故中井匡義、横田洋一の諸兄があります。三十年振りでまた同窓會の仕事をお手傳ひするのでありますが其の間に生じた大きな事情變化を見逃す事が出來ません。

第一に學園が大きく成長したものでありまして卒業生としても其の出身學校と云ふより學園に第一の關心を持つ可き時期になつて居ります。從つて今日一丸となつて『成蹊會誌』が發行されるのは誠に機宜を得た事であります。次に私個人の事となりますが、人生五十年の域に達しますと、寧ろ次の時代に御讓りする責を果たさなければならぬと云ふ感が强まつて居ります。何か學園の爲めに盡しまして一方ならぬ御恩義を受けました中村先生及び岩崎男爵に萬分の一でも御酬いし度いと念願して居ります。

先日丹羽兄が常務理事就任の御挨拶をされた内で最も私の關心を引いた言葉は「何が成蹊精神であるか」と云ふ疑問でありました。今後學園發展の上に最も重大なる事でありますから同窓生諸氏もどし〳〵意見を述べられる事と期待しますが今回は丹羽兄が常務を擔當される事になつたためでありますから卒業生の意見を學園當局に傳へる機會が增大した譯で、眞に喜ばしく思はれます。何れ私も機會がありましたら海外にて長らく暮らした者の立場から意見を述べさせて頂く積りで居ります。

成蹊斷想

成蹊實業專門學校
同窓會委員長
成蹊學園常務理事　丹羽孝三

二宮尊德翁に面談を斷わられた富田氏が强いて願つた所、翁は「貴公は豆と云ふ字を知つてゐるか」と尋ねた。富田氏は不審に思つて「知れり」と答えると紙を出して豆と云ふ字を書がせた。翁は下男に命じて箕に豆を盛らせて庭前につないだ馬に富田氏の書いた豆の字と眞實の豆とを持つて行かせた。馬は豆の字を顧みないで眞實の豆を喰つた時に翁は富田氏に「豆の字が出來た後豆が出來るのか豆が出來て豆の字が出來たか。儒者は豆の字さへあれば豆はなくてもよい樣に考えてゐる云々」と云つたと云ふ話をよく成蹊時代に聞かされて學生の自發的精神の缺如、教師の熱と自信の不足、言行不一致、不消化の學識などを戒められたことを憶ひ出す。

「吾等の生涯のうちに二度までも人類に名狀しがたい悲慘をもたらした戰爭の慘禍から次の世代を救ひ度い」と國連憲章に書いてあるそうだ。こう云ふ平和を愛好する諸國民を信頼して日本はその安全と生存を保持することを決意したと憲法には書いてある。「戰爭の永久放棄」「軍備の全廢」「交戰權の否認」然かもこの憲法は連合諸國によつて確認された憲法なのである。史上かつてない平和國家、世界最初の新しい性格を持つた國、こゝまでは誰にも話の筋は通つてゐる。所が講和が問題となり總理大臣が話の筋を通したつもりで「無軍備」こそ「わが國民の安全幸福の保障なり」とか「國民の誇りなり」などと演說すると騷がしくなるのである。何故「無軍備」が「安全」なのか判らないと云ふのである。判らないと云ふと工合が悪いのか論理の飛躍だなどと云ふのである。國會などもこの「深刻重大」な事件の論議は活潑だが事柄の核心をつかぬうらみがあるなどと批評されてゐる。國家の安全保證の爲め軍を備えると云ふ話なら判りが良い。平和を誠實に求めて軍備を全廢したのは日本だけらしい。日本が信頼してゐる平和愛好の國々は安全と幸福の爲めに軍備を擴張してゐるとのことである。そこで筋の通つた話が判らなくなるのである。無くとも持たなくとも幸福で安全であり得ると云ふ考は今の世の普通の體驗からは生れて來ないのである。物は澤山ある程幸福だ權利も多い程よいのである。資本家の利益追求も勞働運動の目的もそれである。事毎に相容れない樣に見える

二つの思想（共産非共産）も其の點だけは同質だと云はれ、國會でも歳費の値上げだけはいつも滿場一致、論議の好きな人達もこの點に反對演説を聞いたことがないと笑つてゐる。この點に於ては今の全政黨と云ふよりも今の世界は同じではないだらうか、同一線上にだけ右と左があるのだ。同質だからこそけんかになるのだとも云ふ。即ち持つことに捉われてゐる點に於て資本主義も共産主義も同質と云ふのである。持つことが悪いと云ふのではない捉われることが不幸の基と云ふのである。この二つの主義理論からだけでは持たなくても安全幸福は保證されるといふ考は出て來ないのではないだらうか？史上最初の新しい性格の國を創造する義務と必要に迫られてゐるのが日本である。創造は模倣ではない。

私は又茲で成蹊時代の斷食を憶ふ。斷食とは食を斷つことである（絶食とは違ふ）生きる爲めには絶體に必要とされる食物を或る目的の爲めに自ら進んで斷つのである。食には二種ある。普通に肉體を養ふ食物と精神の糧と云はれる食物即ち思想これである。私が今云ふのは後者即ち思想の斷食である。ファショ料理を無暗に食いすぎてすつかりからだをこわした日本は今や歐米式の自由料理やソ連式の共産料理で其の健康を取り戻そうと焦つてゐる。然し日本が念願してゐる戰爭のない世界と云ふ健康狀態までに戻る樣な營養素はこれ等の料理のうちには含まれてゐそうもない。調理は料理人の粹を集めて實に見事である。効能書も立派である。曰く「人民を死の恐怖から解放する」解放料理や「世界恒久平和が生れて來る」と云ふデモクラシー料理である。が本氣にして食べてゐると原子中毒で人類が全滅しそうだと云ふ人もあり、世界は今や其の恐怖症になやまされてゐると云ふ。それが悪意で調理されてゐないだけに仕末におえない。そこでこれ等の料理を一度棚上げして斷食をして見たらどうかと思うのである。そして靜かにスポイルされない人の世の姿を味つて見るのである。人工を加えない本當の味が發見され軍備が必要な世の中が本當か軍備の無い方が幸福かが力まないで體得されるのではないかと云ふのである。眞味を體得してから諸々の料理を味ひ別けるのである。この斷食を先哲と云はれる樣な人達は皆やられたのである。キリストや釋迦は實際の食を斷つたと云はれてゐる。デカルトとかあのコペルニクス的轉回で有名なコペルニクスも思想的斷食者と云えよう。「肱を曲げ水を飲んで寢ても幸福だ」とか「子孫の爲めに美田を買わず」とか「無一物が無盡藏」だとか「死ぬことこそ生きることだ」とか……こんなことは字に書いた豆では何にもならない。新しく生れかわる必要の日本。新生日本では無軍備こそ幸福であり誇りであることが生活體驗を通じての實感とならねば嘘だ。

成蹊教育が生れて來たものを憶ふや切なるものがある。

感想

成蹊高等學校
同窓會委員長
成蹊學園理事　村上正夫

その昔と言つても成蹊が池袋にある時代に成蹊の新教育とは如何やうなものかと思つて訪れた人が、校門を入るとむさ苦しい恰好で植木の手入をしてゐた人に、中村春二先生にお會いしたいのだがと尋ねると手の鋏を休めて私が中村ですがといふので訪門者は唖然としたといふ話がある。私は教育といふものに全くの門外漢であるが實踐教育といふものに大きな魅力を感ずるものである。吉田松陰先生は維新を警醒せられ、福澤諭吉先生は新知識の普及に努められたのであらうが、私が共感するものは中村先生と同樣にその實行の面である。

私は圖らずも成蹊高等學校同窓會の委員長を引受けることゝなつたが全く菲才で大きな抱負も持合はさないが右に述べた先哲に學んで些細なことでも逐次實行に移して行きたいと思ふ。其處で考へられるのは成蹊の各學校同窓會の大同團結である。現在は高等學校の他に、專門學校、中學校、實務學校と夫々同窓會が分れてゐるが源は一つの理想に發した學校であつて、それが社會の情勢によつて幾變遷を辿つて來てゐるのである。先般成蹊大學の設立によつて高等學校も舊制高等學校になり近く最後の卒業生を送り發展的解消をとげることとなり、今後は大學の同窓會が生れることであらう。夫々の學校は教育の課程こそ異るが一つの源から出た同窓であることには變りがない。そしてこれらの同窓生が相集り一つの同窓會を結成する機運が熟してゐるやうにも思はれるし各同窓會はそのやうに成長を遂げてゐる。

その曉に欲しいのは同窓會館である。同窓會の活動の基盤として何も善美豪華を求めないが一つの會館を持ちたい。これも同窓生各位の理解と協力によれば敢て難事ではなからう。會館に行けば同窓の誰彼がゐて學校時代を語るもよからうし仕事の話をしてもお互に得るところがあらう。想像してみるだけでも樂しみである。

そこで成蹊の發展を希求してやまない私は成蹊の近況を顧みなければならない。大學を設置することに就いては種々傾聽すべき意見もあり私も一つの愚見をもつてゐたが、大學は既に發足したのである。私は大學としての成蹊がその理想とする教育を大學迄の一貫教育として具現して貰ひたいのである。學問は日々新たに眞理を追及するものでその方法としての教育には確固たる理想がなければならぬ。その意味からいつて私なりの考へでは成蹊の教育は誠と愛の教育ではなかつたかと思ふ。誠とは知的な正直さ、愛とは大きな抱擁力といへる。そして誠も愛も實踐によつてその大を增すものである。私事をいつて相濟まないが私が成蹊の小學校から中學校に入る頃父の勤務の都合で他の中學校を受驗することになり、父が中村先生の處に御挨拶に伺つた時先生は「若し入れなかつたら私が預る」といはれ父は獨りで九州の地に轉勤して行つたことを思ひ出す。敗戰後の激變期にこんな話は昔話であらうが教育の一つの姿として記したまでゝある。

成蹊の教育を徹底させるには先生、學生、生徒とその學校を出た同窓生の緊密な連繫の下に前進することにある。何卒各位の叱正と鞭撻をお願いしたい。

駑馬の辯

成蹊學園理事　大倉恒光

わたしには、いま、理事就任の辭を述べる抱負はない。大體、理事といふ無報酬の、時間潰しの、而かも厄介な仕事を引受けるに至つたわたしの心境は、先づわたし如き者でも勤まるといふ親近感を同窓の諸氏に持たせ得ること、次に母校に對する御恩報じ、最後に凡ゆる機會が自己鍛錬の道場であるといふ、以上三つの事情に由るものである。

だから、必要とあらば、社命により、他に代替し得る人のなかつた時、市會議員を一期勤めたこともあつたし、推されゝば、組合員五千名を擁した三菱職員組合の事務局長を二期勤めたこともあつた。

凡そ、中學、高校そして大學と前後十一ヶ年の間、文藝部委員をやり通したといふ事實は、よほどの物好きか、或はよほどの世話好きでなければやることではあるまいと思ふ。かく云つてくると、緣の下の力持ちは、わたしの本性かも知れない。月謝を出してもらつて勉强してゐた時代は、前述の趣味仕事をやつた處で、誰も文句は云はないし、又飯の食ひはぐれの心配もないが、習ひ性となつたせいか、三菱生活十五年の大半も總務人事系統の仕事に終始してしまつた。終戰の年の暮に引揚げてきて、翌年人事部厚生課長となり、四千名の戰災社員と引揚社員の

援護事務に從事した。自ら企畫をしたが、自ら調達にも奔走したし、尨大な住宅再建方策も樹てた。二年間は仕事に明けて、仕事に暮れた。だが、結果は三菱解散受命といふ幕で閉され、昭和二十二年の秋、わたしは敝履の如く棄てられた。

そして、三菱生活十五年の終焉は、實に大枚〇萬〇千圓の手當金であつて、それは當時のわたし一家の生計費の三ヶ月分に値ひする貴重な寶であつた。

その後一ヶ年は、三菱時代の劇務（厚生課長・職組事務局長兼務）から來た疲勞の回復につとめた。その時、わたしを心からはげまして下すつた人々は、K氏、F氏、N氏、M氏、S君とT君であつた。

わたしは、T君を通して學園の暖い心を會得したのであつた。

卒業生理事の任務は、他理事諸公とは自づと違つて、最も新鮮な感覺で、最も鋭い知性を盛つた企畫を行ひ、學園運營の潤滑油となるべき任務であることを自覺し、且つその樣に行動をして行かねばならぬと、わたし自身に言ひ聞かせてゐる次第である。

わたしは、在學の諸君に至近の距離にある故を以て、諸君と對談して、感覺の新鮮さを保持して行きたいと思つてゐる。數多の大學の施設や學生や教授に接觸して、知性の鋭さを失ひたくないと考へてゐる。良い方法と良い手引があるならば、どなたからでも御教示ねがひたい。

自ら學んで、而して自ら實行して、よりよき緣の下の力持ちとなりたいものである。

論說

成蹊大學を論ず

兎も角成蹊大學は四月に發足し、十一月二十三、四日の兩日に亘つて盛大なる開校の式典が催されるといふ。學制改革といふ至上命令に依つてであらうが、新制大學に昇格するか、新制高校に留めるかは、個々の學校當事者の自由である。成蹊は全校職員の「綿密且つ徹底的研究の結果」大學論に決し、理事會もこの勢ひに押され承認し遂に大學設置の運びとなつた。勿論成蹊學園が成長し發展する事自體は望ましい。成蹊園より實務學校へ、實務學校より中學校、專門學校を經て高校へ、高校から大學へと發展する事に何の異存はない。

偖て四月より十一月迄の八ヶ月間の業績を見て將來を斷ずる事は極めて危險であるが、一應その內容を檢討してみたい。

第一に學生數は一、二年合して現在三三〇名である。定員は六〇〇名（プレメジカルコース一〇〇名）であるから定數の約半數强といふ事になる。これも四月から六月にかけて第三次募集までして漸く四〇〇名程集つたが、六月に行はれた東京大學その他官立大學の入試の結果その入學者約七十名が退學し殘つた者が三三〇名。これを質的に見れば遺憾乍ら良好とはいへぬ。故に學生と會つた感じは自ら劣等感に陷つてゐる有樣で「東大に落ちたからゐる」とか「今は腰掛で來年こそは捲土重來する」とは恰も成蹊大學に入學してゐる事を恥とするやうな感じを受け甚だ心許ない。こんな事では二年後の就職はどうなる事かと思ひやられる。

第二に教授側は如何といふに、現在は所謂「教養學部」である關係上舊制高校の教授で間に合ふ爲か、どう見てもお粗末である。專門の教授といへば今回就任された高柳賢三學長と前安本副長官の野田信夫政治經濟學部長その他二、三の教授よりなる。加之最高責任者である學長は週に二日しか來られないし、野田學部長も一、二月前より漸く來校されたばかりである。尤も高柳學長はかゝる條件で學長を引受けられたやに承つてゐるから止むも得ぬが、何んとなく中心がない。思へば昨年大學設置に當り狂奔され教授の人選にも與つて大いに力あつた某教授は今度何んの都合か知らぬが成蹊を辭して京都大學へ轉任したやうな無責任振りである。大學を一つ設置する事は容易な業ではない。曾つて中村春二先生は成蹊學園を創立するに當り、火の樣な教育的熱情と身命を抛つて迄の努力をされ、爲に命迄も速められたのである。この精神が大學に滿ち滿ちてゐなければその將來や暗憺たるものがある。

第三に財政問題である。昨年の大學設置委員會に於ける說明に依れば收支は償つて餘りあるとの事であるが、現在既に赤字の兆が見えてゐる。豫定通り定數の入學者があつてしかも赤字とすれば、現在の如く定員の半數の場合が將來に於てもし續いたとすれば完全に參つてしまい、單に大學だけの問題でなく他校に影響する處甚大である。現在學園各校はその豫算に於て共通經費を除き、獨立採算制をとつてゐるから、授業料を無制限に値上げすれば別の事、これも限界にあるとすれば赤字の補塡は別途より、即ち維持會に依るとかその他から捻出せねばならぬ。曩に小學校新築費を含めて一、五〇〇萬圓募集し、今回は二、〇〇〇萬圓の豫算で新制中學新築を目論んでゐる。三菱の岩崎社長が理事長として君臨してゐた昔ならば兎に角、現在父兄の負擔力は飽和點に達し、一方一般社會は金詰りに汲々としてをり赤字補塡等は思ひもよらぬ。

最後に將來といはぬ迄も來年の見通しは如何。第一學年の入學定數は三〇〇名であるが來年三月成蹊新制高校卒業豫定者は約五〇餘名であるからその半數が成蹊大學に入學するとしても約二七〇名を他の高等學校より入學せしめなければならぬ。第二學年は約五〇名を、第三學年は約二〇〇名を夫々補充しなければ定員に滿たぬ。これだけの人員を現在の成蹊大學の內容に於て果して補充出來るであらうか、今年の例に鑑み不安を感じる。

吾人は昨年所謂「大學設置委員會」の首腦部と大學設置するや否やについて再三に亘つて討論をした。否激論した事すらあつた。吾人は敗戰後の日本經濟の現狀より說き、成蹊の歷史、傳統その他凡ゆる角度より、大學設置は究極に於て、望ましき事であり、一貫教育の立場よりしてもむしろ設置すべきであるが、時期尙早論を唱へた。これに對し委員諸氏は滿々たる自信をもつて吾人を壓し去り、餘勢をかつて理事會をも通過せしめたのである。曾つて「來年東京大學は十萬人の志願者がある」「成蹊の生徒は制度上素質劣惡である」「財政は黑字になる」「大學にならぬ場合職員は動搖の上辭職するであらう」「大學設置こそ全校職員の一致した意見である」等散々聞かされたが現在一々之を反駁する要を認めない。

併し吾人は徒に批評をするばかりが能ではない。大學は既に發足してゐるといふ現狀に注視せねばならぬ。ルビコン河は既に渡つた。今更後へ退けぬとすれば今からでも遲くはない、成蹊大學の在り方を今度こそは一部の獨善高踏論者に任せず、理事者はもとより、教職員も、同窓生も、父兄も、學生も、眞劍に考へて欲しい。成蹊が立つか立たざるかはこゝにある。そして本當の意味に於て「成蹊らしい」大學が可能であるといふ決論に達したならば躊躇する事なく斷々乎として全學園を擧げて邁進すべき秋である。

＊＊＊
＊＊＊
＊＊＊

梅地愼三

二十五年間御世話になつた成蹊から御暇を戴いてもう七年になります。その間に世の中の變りかたつたらありません。終戰後は私共老人の出る幕ではないと考へ、借家の庭の廣いのを幸に農耕にいそしんで居ります。成蹊の傍ですから御出掛けの節は御立寄り下さい。（武藏野市吉祥寺九五二）

最近舊職員の御二人方から色々と教へられる事がありますので御知らせ致します。

（渡邊八郎さん御夫婦が沼津學園の小使をして居るとの御便りに、伊豆に出掛けるのを幸に御尋ねしました。沼津學園は新制中學、高等學校を併立して居る私立學校です。日の當らない暗い小使室で二三時間少しも惡びれない氣品のある昔の儘の渡邊さん御夫婦の快活な御話を伺ひました。おぢさん、おばさんと生徒が出入りします。その折の御話に宮本武藏の自畫像の自贊に『修智者縛智、反愚者脫愚』と云ふ文句がありますが、その本當の意味は小使になつて始めてわかつた樣な氣がします。この仕事も尊いものです。途中まで送られて歸る汽車の中で色々と考へさせられました。（沼津市東熊堂柳ヶ坪沼津學園）

三上和一さんは私より二ヶ月前二十八年間の成蹊をやめて鄕里の島根に歸つて篤農家として生活して居られます。この九月頃の便りの一節に、年のせいかこの頃とても淋しく感ずることがあります。菌取りに行つても夕日の落ち行く山を一人靜かに歩いて居る時などしみ〴〵淋しさを感ずる事があります。昨年までは菌取りに行くと少しでも澤山見つけ樣と狩をする者山を見ずの感がありましたのに、今年はちよつともあせつた氣持が起りません。しかもこの淋しさをまぎらはそうとせず、ひたすらに淋しさに徹して思想的に何か確かなものを握つて、所謂「安心立命」したいなど考へることもあります。（島根縣邑智郡高原村小下塾）

私はこの御二人の樣な御氣持には仲々なれそうもありませんが、何とかして「徹貧者、脫貧」の境地に立ちたいと念願して居ります。

學園概觀

現在の學園組織は左の通りである。第一に經營面に於て理事會が之を運營してゐる事は從來と變りないが、資金調達面に於ては昨年より發足した維持會（會長石坂泰三氏）の活動が與つて力ある。理事會は本年三月新制大學開校に伴ひ改選され、新理事氏名は左の通りである。

理事長　石黑俊夫
常務理事　松岡梁太郎
〃　丹羽孝三
理事　岩崎忠雄
〃　高柳賢三
〃　石川一郎
〃　渡邊鎌藏
〃　櫻田武
〃　賀集益藏
〃　吉野榮一
〃　東畑精一
〃　乙骨五郎
〃　鈴木一郎
〃　上原義雄
〃　村上正夫
〃　大倉恒光
監事　高橋錬逸
〃　池田謙藏

維持會は頭初小學校新築、新制大學設立に要する費用一、五〇〇萬圓募集の爲に設立され昨年は、入學試驗前後に於ける寄附及び生徒より一人に付八、〇〇〇圓の募金を行ひ所要額に達し、本年度は生徒よりの寄附は之を中止し專ら入學試驗時に於ける寄附に賴り約九〇〇萬圓に達してゐる。之は獨立會計とし必要に應じ理事會の承認を得て、學園施設の擴充その他に使用してゐる。

尙來年度の新規事業計畫としては新制中學校々舍新築――建坪約六〇〇坪鐵筋コンクリート二階建、建築費約二、〇〇〇萬圓――を豫定してゐる。

第二に教育面に於ては本年四月より成蹊大學が發足した結果現在學園には小學校、中學校、高等學校、舊制高等學校、大學の五つの學校がある。之等の諸學校を統轄する總長は高柳賢三博士が本年四月就任され、その下に小學校（校長鈴木一郎、主事滑川道夫）、中學校（校長鈴木一郎、主事上原義雄）、高等學校（校長鈴木一郎、教頭飛田隆）、舊制高等學校（校長乙骨五郎、主事小島鉦作）、大學（學長高柳賢三、政治經濟學部長野田信夫）の五校が互に有機的連關を持ちつゝ、夫々教育上の自主權を持ち、審議會或は教授會等に依つて運營されてゐる。尙舊制高等學校は學制改革に依り二十五年三月を以て廢校となる。學生數は十月末現在總員二、一四六名その內譯は大學三三〇名、舊高校二四一名、新高校三三八名、中學校六一九名、小學校六一八名。

事務方面に於ては學園事務局が新設され、局長には宇佐美珍彥氏が就任され、その下に學務部（部長南條文英）、庶務部（部長岩永源作）、會計部（部長岩永源作）、圖書館（館長倉石五郎）、醫局（主任寺尾信治）の五部があり、學園共通の事務を取扱つてゐる。

次にPTA活動も活潑なる模樣である。現在小學校（會長美濃部亮吉）中學校（會長高瀨莊太郎）、新制高等學校（會長石坂泰三）の三校に設置され、バザー、記念祭等に協力し、その實を擧げてゐる次第である。

成蹊會事務報告

同窓會日誌

昨年六月同窓會誌復刊第一號を八年振りに諸兄の御手許へ御屆して以來一年有半を經過した成蹊會の活動狀況に就いて概觀する。

昭和二十年十月二十日高等學校同窓會總會を以つて、戰爭前後その機能を停止してゐた同窓會は活動を開始し次いで成蹊實務學校、中學校、實業專門學校各同窓會も發會し、右諸學校の統合團體である成蹊會も漸く軌道に乘つて來た。

昭和二十三年六月、學園に於て久し振りに記念祭が催され、約一五〇名の同窓會員が參集した。

六月下旬、高等學校主催のダンスパーティを丸の內工業クラブに於て開催、約四〇〇名の會員及びその家族が一堂に會し、若葉香る薰風に樂しき午後を過した。

本年二月二十一日、成蹊會主催の枯林忌を學園講堂に於て開催。蓋し八年振りの枯林忌と思はれるが當日は中村先生未亡人初め、學園職員、生徒の外目白の成蹊女學校の奧田校長及び卒業生代表も參列し、成蹊會より約四〇名の出席を得て、嚴肅の裡に式典が催された。尙特別講演として穗積重遠、田中耕太郎及今村繁三、三氏の御話があり、式後圖書館にて今村繁三氏を圍み池袋の成蹊時代を回顧する座談會があつた。散會午後八時。

三月、學園理事會改選の結果、成蹊會代表理事であつた神義之介（高校）、木梨信彥（高校）の兩君辭任し、丹羽孝三（專門）、村上正夫（高校）及び大倉恒光（高校）の三君が新理事として成蹊會より推薦された。

同時に高等學校同窓會委員長木梨信彥君の後任として村上正夫君が、中學校同窓會委員長伊藤友一君の後任として栗林一二君がそれぞれ新委員長として就任された。因に實務學校同窓會と桃蔭會中學校同窓會を桃源會と稱してゐる。

五月、桃蔭會春季總會を丸ノ內中央亭に於て開催し、出席者約四〇名。來賓として今村繁三氏、兒玉九十氏、梅地愼三氏、及び三浦經太氏が來會された。

六月、恒例の學園記念祭が催されこの日高等學校同窓會は學園本館前庭にビヤホールを設け村上委員長以下接待に當り、二五〇リットルのビールを飲み乾して了ふ盛況であつた。卒業生及びその家族の來會者約三〇〇名。

七月十五日、桃源會主催のビール

學生の校友會は各校獨自の組織の下に運營されてゐるが、文化部、運動部共に活潑で、前者に於ては、記念祭、文化祭、蹊會、展覽會等、後者に於て陸上に水上競技に著しいものがあり、成蹊傳統の精神を以て各地に成蹊の名を高揚してゐる。

パーティを丸ノ内中央亭に於て開催し出席者約七〇名。學園より高柳總長、松岡常務理事を始め舊恩師を招待し師弟相擁して歡を盡した。尚當夜は三鷹事件の晩であり中央沿線の會員は歸宅が夜半十二時過ぎになつた想ひ出の日である。先の記念祭ビヤホール及び今回のビールパーティのビールはニュートーキョー森新太郎君（高一）の厚意によるものである。

十月二十一日、參議院議員會館に於て成蹊會各校合同委員會を開催し出席者約五〇名。從來は各校別の同窓會を開いてゐたが今回は丹羽孝三君が學園常務理事に就任される事になり、成蹊會として同君を强力に支持し且つ激勵する意味に於て一堂に會した。大類實務、栗林中學、村上高校の各委員長も出席し盛大であつた。

尚來る十二月十七日には丸ノ内工業クラブに於いて成蹊會主催のダンスパーティを開催する豫定である。＊

會費徴收告示

同窓會財政報告欄に於て説明致しましたが本年末迄に會費名簿代未收分を徴收する事になりましたから未拂者は同封の振替用紙御使用の上御拂込願います。尚念の爲未拂分を記入して置きましたが若し當方の手違いで誤記がありましたら御訂正下さい。既拂者には振替用紙を同封致しません。

宛先(イ)高等學校卒業者
東京七〇二四三番　武藏野市吉祥寺九五二　成蹊高等學校同窓會
(ロ)實務、中學、專門學校卒業者
東京二二四五一番　武藏野市吉祥寺九五二　成蹊會

成蹊會委員

實務學校	大類袈裟吉	鳥居御嶽	吉田松太郎	青山太仲	竿代　靖
中學校	栗林一二	栗原美能留	早水守夫	永田龍之助	森　太郎
	田中博次	大久保通忠			
專門學校	丹羽孝三	龜井壽雄	小鹽高弘	江口利夫	
高等學校	村上正夫	大倉恒光	木梨信彦	河野義克	横山勝義
	谷岡喜久藏				

各校同窓會委員

實務學校（桃蔭會）

委員長　大類袈裟吉　副委員長　鳥居御嶽

1回	大類袈裟吉	磯部愼治	2回	安野　智	鳥居御嶽
3回	谷村秀等	吉田松太郎	4回	若林卓彌	青山太仲
5回	田中謙治	磯野三男	6回	清水聰司	竿代　靖
7回	小倉　勝		8回	久米成次	大西雄次郎
9回	島田正雄	宮崎弘文	10回	板倉正夫	田中全太郎
11回	高田　亨	小川任一郎			

中學校（桃源會）

委員長　栗林一二　副委員長　栗原美能留

1回		2回	小鹽高弘	3回	堀内　信	4回	栗原美能留
5回	栗本東一	6回	森　太郎	7回	横田洋一	8回	田中博次
9回	井上秀郎	10回	大久保通忠	11回	上田正一	12回	中西文吾
13回	藤野泰吉						

實業專門學校

委員長　丹羽孝三　副委員長　龜井壽雄

1回	相原　茂	2回	小鹽高弘	3回	江口利夫	4回	青柳俊作
5回	渡邊一美						

別科

1回	文傳正夫	2回	山崎嘉次	3回　田中正太郎

高等學校

委員長　村上正夫　副委員長　河野義克　横山勝義

常任委員

中村　浩　佐藤泰正　横山勝義　田中榮一郎　谷岡喜久藏　堤　一己
日野貞雄　山手　享　紺野邦夫　粟飯原景昭

委員

1文	三好道矢	1理	平塚保明	2文	大倉恒光	2理	前原莊一
3文	中屋健弐	3理	中村　浩	4文	千坂親滿	4理	南部豁四
5文	佐藤泰正	5理	田賀秀和	6文	河野義克	6理	後藤一雄
7文	中澤清磨	7理	渡邊千春	8文	永井邦夫	8理	横山勝義
9文	田中榮一郎	9理	吉武泰水	10文	今村知雄	10理	青野惣一
11文	赤松　明	11理	赤星國夫	12文	瀧　孝吉	12理	平井秀松
13文	永井篤三郎	13理	谷井篤三	14文	前田達郎	14理	日野貞雄
15文	岩崎英二郎	15理	竹内端夫	16文	山手　享	16理	高桑秀雄
17文	八木章夫	17理	日野哲夫	18文	松平直樹	18理	島村欣一
19文	渡邊泰二	19理	紺野邦夫	20文	緒方四十郎	20理	粟飯原景昭
21文	杉村弘二郎	安藤昭三		21理	有吉　凞	山岸常夫	日高達太郎

＊その間各同窓會別に例會が開かれ實務學校は毎月二十一日に（中村先生御命日）、中學校は毎月十五日に專門學校は年四回、高等學校は月に一回、成蹊會は必要に應じて、毎月四五回の會合が工業クラブ、中央亭、三菱鑛業會議室、參議院議院會館等でそれ〴〵開催せられている。勿論東京在住の會員だけであるが、互いに舊交を溫め思師の面影を追憶し母校の現狀を語り、樂しき一夜を過して現在に至つているが今後共より盛大なる會合にしたく思ふ。特に成蹊會委員會は各校代表者が會合し學園その他重要なる問題につき討議し、同窓會としての態度を決定している。この外運動部文化部を問はず卒業生の會合、各クラス會その他成蹊の名の下に集る會合は枚擧に遑ない事と思はれる。

以上過去一年半の同窓會活動を回顧したが、主として東京に於ける活動であり、地方會員には僅かに通信によつてその模樣を傳へるだけに止り、地方會員諸君とは意思疏通を缺く憾みがあつた。今後本誌を增刊する事により同窓會の現狀、學園の狀態等報告する事としたい。

成蹊會名簿について

次に本年二月八年振りで成蹊會名簿を發行したが、尙不明の個所が少なからずあり會員諸兄の協力を得て完全を期したく思ふ。今後共出來得れば年一回は發刊する豫定である。

昨年會員諸兄の御手許に御屆けした名簿は御覽の通り住所職業等不明の箇所が尠くない。云ふ迄もなく同窓會の基盤となるものは會員名簿である。正確なる會員名簿に依つて初めて同窓會は活潑に運營され鞏固なものになる。過去一年の間委員諸君の努力に依り、又個人的に住所職業變更の通知を受け、その都度原簿を訂正してゐるが尙一層の完全を期す爲現在名簿の再調査を行つてゐる次第である。就いては同封の振替用紙裏面通信欄又は郵便ハガキに住所職業（大學生は學校學科名）を詳細記入の上御通知願い度い。尙名簿には不明の爲記載洩れの會員の消息について御存知の方は面倒ながら併せて御知らせ願ふ。當方に於て整理出來次第二十五年版名簿を編纂する豫定である。

同窓會財政報告

同窓會財政狀態は別項記載會計報告の通りであります。詳細の說明は各校同窓會委員會の席上で致しましたから省略しますが、實務中學專門の各學校はからくも收支を償つてをりますが、これだけの殘金では到底來年三月の會計年度末迄同窓會活動を續ける事は出來ません。殊に高等學校に至つては赤字財政で約五萬圓の借入金に依つて賄つてゐる次第です。

何故かくも財政狀態が苦しいかと申しますと會費及名簿代金の巨額の滯納に起因してゐるのです。特に二十三年度版名簿代に於て著しいのです。當方に於てこれら滯納額を調査した處、約二十萬圓の未收金があり、この金額を未拂者に於いて御支拂下されば同窓會財政は一息つく事が出來、成蹊會誌も增刊し、名簿も發行出來るのです。

各學校同窓會委員會に於てもこの滯納金問題に腐心し、滯納金切捨論も出て、會費追加徵集せよとの案も出ましたが、既拂者がいつも損をする結果にもなるので、此際會員諸兄の御協力を得て年末迄に滯納金を一掃する事になりましたから、何卒徵衷御察しの上御拂込下さる樣切に御願申上げます。

會計報告

	實務學校（自23年7月21日 至24年10月31日）	中學校（自23年8月22日 至24年10月31日）	專門學校（自23年8月25日 至24年10月31日）	高等學校（自23年4月1日 至24年3月31日）
收入ノ部				
會費・名簿代	16,400.00	19,250.00	15,050.00	125,451.18
借入金	650.00		2,000.00	110,000.00
利益金（ビールパーティー）		5,635.00		
他學校借入金（個人）				11,541.00
他學校立替金返濟金				10,444.00
雜收入				71.90
桃源會基金殘金		1,200.00		
前期繰越金				2,740.25
收入總計	17,050.00	26,085.00	17,050.00	260,248.33
支出ノ部				
名簿發行費	7,850.00	9,500.00	7,850.00	140,900.00
同窓會誌發行費	1,000.00	950.00	750.00	15,830.00
印刷費	300.00	600.00		2,793.00
事務用品費	400.00	380.00	300.00	4,088.50
交通通信費		2,950.00	650.00	10,203.00
事務費及雜費	500.00	3,100.00	600.00	8,000.00
集會費		3,560.00		2,738.00
成蹊會納付金	7,000.00	5,000.00	6,000.00	3,000.00
寄附金				6,400.00
慶弔金				1,000.00
他學校立替金				10,444.00
借入金返濟金				53,000.00
支出總計	17,050.00	26,040.00	16,150.00	258,396.50
差引次期繰越金	0	45.00	900.00	1,851.83

成蹊會（自23年12月1日 至24年0月31日）	
收入ノ部	
實務學校	7,000.00
中學校	5,000.00
專門學校	6,000.00
高等學校	13,000.00
收入總計	31,000.00
支出ノ部	
集會費	10,560.00
事務用品費	660.00
交通通信費	6,684.00
事務費及雜費	5,800.00
慶弔金	6,610.00
（淺野先生 ¥3,110.00 鈴木友吉先生 ¥1,000.00 枯林忌 ¥2,500.00）	
支出總計	30,314.00
差引次期繰越金	686.00

編集後記

○

成蹊會誌第一號を諸兄の許に送る。此種の同窓會誌は戰前に於ては各學校同窓會別に發行してゐたが、その後途絕へ同窓會の存在すらあるやなきやの狀態が續いた。戰後は僅かに高等學校同窓會誌が一回出ただけである。今回は以前に發行されたことのある各學校同窓會誌を統合して「成蹊會誌」と名付け新發足した次第であるから、何卒御愛讀と御後援を賜り度い。尙表紙の題字は神義鐵先生の筆になるものである。

○

會員數は二、〇〇〇名を突破した。昭和十五年度版の名簿に依ると約六〇〇名であるから異常なる膨脹率である。つまり最近の成蹊の傾向は大量生產をしてゐることになる。勿論財政との睨み合せでかくせざるを得ないのであらうが、凡そ個性敎育とか人格敎育とかは緣が薄くなるやうである。この四月には成蹊大學も出來た。この大學が立派なものになるかならぬかは遽に豫斷を許さないが、量的には發展した成蹊が質的に低下するやうな事があつたら一大事である。

○

かゝる際に今回丹羽孝三氏が學園の常任理事に、村上正夫、大倉恒光の兩氏が理事に就任された。御苦勞千萬な事であるが、母校の爲我々同窓生の代表として大いに奮鬪しいて戴き度い。

☆　☆　☆

昭和二十四年十二月五日印刷
東京都武藏野市吉祥寺九五二成蹊會內
東京都口黑區碑文谷一二一三